

村田連發鏡改良考案ニ付再出上申書

最中ニ提出仕候同考案ハ元五連發ナリシモ製造ノ際苦痛彈室
ノ下部外面突出過大ニ相成担負ニ不候尤加故ニ四連發トシテ
試験委員ニ付テ試験時施行相成僅得其其後種々改良
ヲ加、再ニ提出致修処而一層研究ノ上苦痛彈室下方凸部
ヲ擴大ナラシメスシテ五連發トナスヲ得テ依テ可成酌量
ヲ減シ五連發ニ改造致候條多ニ審面及説明書至ニ改正鏡
相添、提供修中

明治三十四年二月五日

東京海軍造兵廠

海軍技手 本岡 鍾次郎

海軍技術會議 出束

村田連發銃改良説明

考據ハ五連發ニ改ム

番面参照

一 A 蓄彈室 銃尾極蓋下方ニ装シタル蓋ニテ之ヲアヒニシム
 装ニ改ム

一 B 甲 蓋 極蓋ノ下部ヲ覆ヒタルモノニテ薄キ銅板ヲ以テ作
 出セシメ而シテ其内部ニ揚彈發條ヲ坐セシム

一 C 揚彈發條 蓄彈室ニ存リテ彈藥色ヲ揚起セシム

一 D 彈藥番 蓄彈室ノ下方ニ存リテ常ニ彈藥色ノ昇揚ヲ
 抑制シ而シテ尾栓閉鎖ノトキ用キテ彈藥色ヲ装填ノ位置
 ニ居ラシム

一 E 彈藥番發條 彈藥番ヲ上方ニ揚起セシムモノ

一 F 洗矢番金 洗矢ヲ添附シタルヲ以テ之ヲ設ケ彈藥番及

同發條ノ支基トナス

一 G 洗矢

連發裝置ニ関セサルモ要用ノ具タルヲ以テ新設ス

一 H 連發雷

舊トノ彈藥匙軸ノ軸ノミヲ改造シ連發器トハ單發ヲ行クニ自由ナラシム

右ノ外多少ノ修理ハ圖面ニ示ス

操練法

一 彈藥色ハ常ニ五發ノ彈藥色挾ニ挾ミ置クモノトス

一 裝填ノトキハ連發止ヲ連發ノ位置即チ水平ニ置キ而シテ後尾

柱ヲ啓キテ彈藥色挾ニ挾ミタル彈藥色ヲ蓄彈室ノ上方

尾柱前方ニ當テ彈藥色ヲ壓シハ順次蓄彈室ニ納ル

一 銃ニ裝填スルハ舊ノ如シ

一 單發或ハ安全（尾柱ヲ開閉スルニ彈藥色ニ関セズナシ）ノ位置

ニテスハ連發器ヲ單發ノ位置即チ垂直ニ置クヲ要ス

新舊重量比較表

舊銃三粒ノ重六七ノ

一 彈藥是 彈藥計共

一 彈藥是 彈藥計共

一 彈藥是 彈藥計共

一 彈藥是 彈藥計共

一 彈藥是 彈藥計共

一 彈藥是 彈藥計共

一 彈藥是 彈藥計共

金量

改正銃ニ附屬セシ重量

一 舊彈室

一 甲 裝込

一 揚 彈發條

一 彈藥計共

七 〇 〇 〇 〇

六 〇 〇 〇 〇

五 〇 〇 〇 〇

四 〇 〇 〇 〇

三 〇 〇 〇 〇

二 〇 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 〇

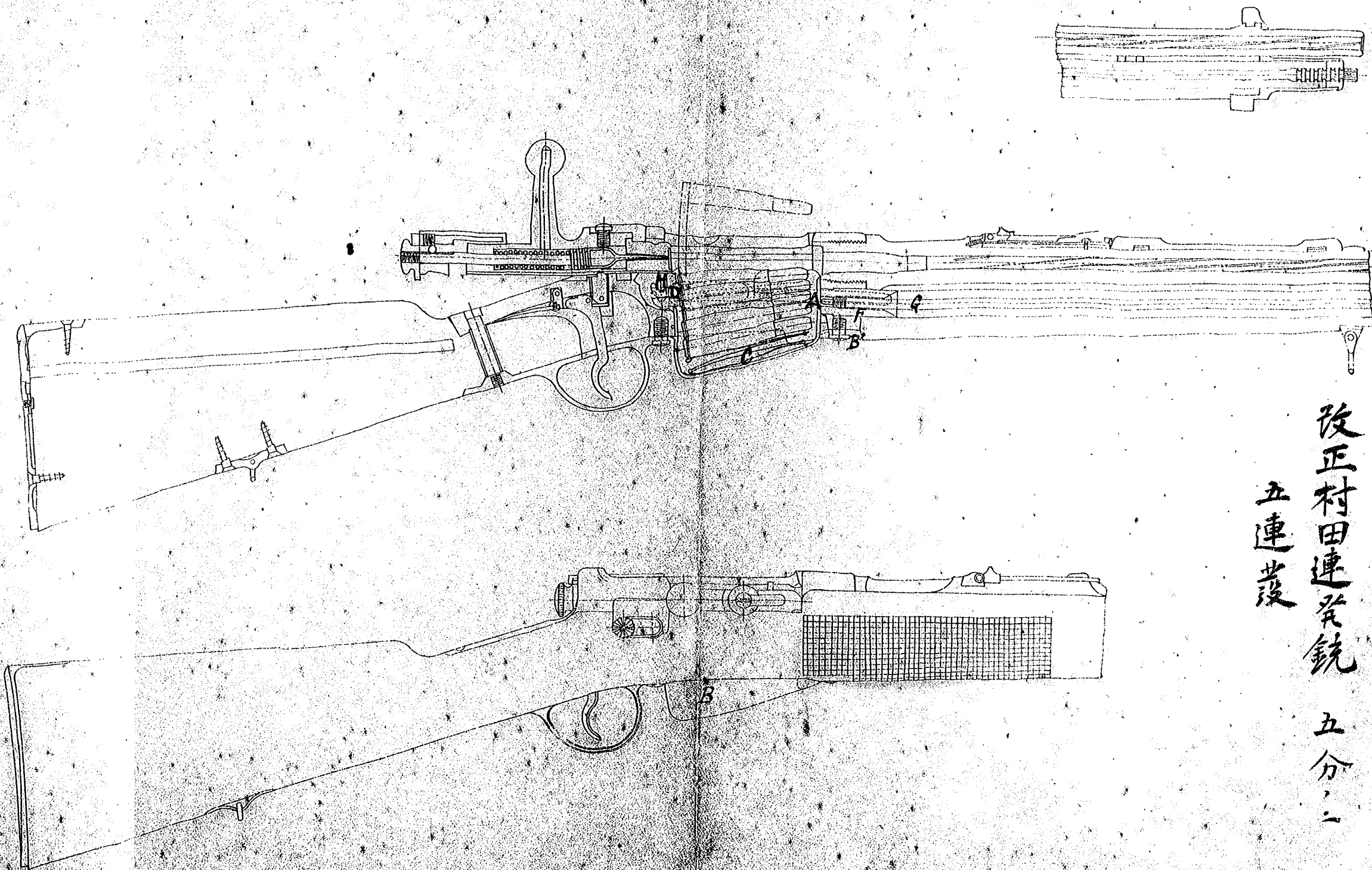
〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇

卷之四

1116



改正村田連發銃 五分二
五連發

技曹議案第一号二一

海軍採用式小銃調査委員會
明治三十四年二月二十六日開會

決議

一技曹議案第一号一二決議本岡式ハ技曹議案第一

二号四本岡式ト改正元下

二海軍採用新式銃ヲ標準ニ目的ヲ以テ自衛裝置銃

二銃ヲ試製實驗元下

右決議及報告修了

明治三十四年二月廿六日

委員長海軍大佐中村 靜嘉

海軍技術會議長角田秀松殿

海軍採用式小銃調査委員書

明治三十四年十二月十六十七日及二十三日開會

決議

從來委員決議ニ賛成不能ナル点アルが故ニ更ニ全体ニ
漲リ尤々決議ス

一村田銃ハ最早我海軍軍用銃ニ適當ナル外認め依テ將來
ハ現在モノニ豫備銃として用ル外採用セサルヲ可トス

二村田銃ヲ改良シテ採用スルヤ否ヤノ点ニ就テハ時日経過

其他諸種ノ点ヲ考ヘテ却テ全然新式銃ヲ採用スル

利益アルニ義カサルコト認め

三新式銃ハ陸軍三十年式(最新改良ヲ加スルモノ)ヲ採用

スルト最利益アリト認め

右決議及報告候也

明治三十四年十二月二十三日

委員長海軍大佐 嶋村連雄

海軍技術會議々長有馬新一殿

追々本決議理由別紙通有之候條此致副中
作

茅

村田銃ヲ其代給官軍用銃トシテ將木ノ味用ニシ
下向ト七五粒也

村田銃ニ九ノ如ク動點ナリ是ハ此法議ヲ為セリ所ナリ

(一)

七五粒ノ彈藥ヲ一箇ノ彈倉以テ入ルニ六五ノ時ヲ要
不故ニ四五粒ヲ要ス時極ニ速ナリテ五箇ノ一箇ノ七五粒ノ連
發ヲ要スニ在テは發射ノ早速ノミヲ用ルルナリトナル所ナリ
ナリ是ハ連發銃タル一大要件ヲ函クモナリ

(二)

彈倉内ニ在ル七五粒ノ彈藥ヲ射合ニ入ルルナリ之ヲ要
ス注意シテ算シ居ルニヤナク果シテ射合ニ入ルルナリ
中々容易ニ見知リ得ル裝道無ニ故ニ昨軍北番ノ
戰役中ニ在テ我陸兵中ノ一隊ノ銃ニ裝附スル者
彈倉ニ裝附アルモノ想ヒテ其裝附スル者其
ナカチナリトナリ

(三)

彈藥彈倉以多破裂七ノト、從來點火多不、是亦一大
缺點也。

(四)

小銃重化如、融ルハ彈倉、密シキ其ハ計ハ彈藥ノ
運動、阻止スル下リ。

(五)

村田銃、我海軍ニ採用ス、元來陸軍ト同様、小銃ヲ
用フハ、經濟上、第三、彈藥供給上、極テ便利ナリ、中
ハ、五ノ五、由リノ思ハル、然ルモ、今ノ陸軍ニ於テ、所
謂、三ノ三、式、小銃ヲ以テ、村田銃ニ代フル、是ハ、以テ、將來
復テ、村田銃ヲ製造スル、無カシ、隨テ、滿洲ニ於テ、引
續キ、之ヲ採用セシムル、新ニ、玉、蹴テ、起スル、ハ、金、陸
軍、古、小銃ヲ、張テ、之、ハ、二、通、下、下、此、如、本、事、之、類、

(六)

ノ、好、下、シ、中、カ、ル、別、多、言、カ、要、セ、ル、ハ、
村田銃、中、三、新、舊、二、種、下、下、其、藥、室、ハ、往、同、心、カ、多、ク、隨
テ、彈、倉、ハ、往、不、同、ニ、シ、甲、銃、ニ、同、心、ス、ル、モ、乙、銃、ニ、

適合セサルモノアリ供給上非常ノ混雜ヲ生ズル恐レアリ

第二 村田銃ヲ改良シテ採用スルヲモ不可ナリト決定セシ理由

村田銃ハ前記ノ如キ缺点アルカ故ニ其儘ニ引續キ將來ニ用フルノ不可ナルハ蓋シ明カナリト虽モ現在我海軍ニハ此小銃ヲ所有スル下一萬五千九百餘ニシテ彈藥モ亦七百餘萬莖ノ貯藏アリ之ヲ活カシ使ヒシトスルノ情ハ蓋シ何人トモ起サルヲ得サル所ナリ即チ議案モ若シ村田銃ヲ其儘用フルヲ不可トセハ廿秋原案ハ本國ニ依リ改良ヲ加ヘテ採用シテハ如何トノ事ヲ諮問セラレタリト案ス然レトモ之ヲ實行(村田改良銃ヲ用フルト)セトセバ尤ノ諸点ヲ熟慮セサルハカラス

(一) 村田銃ノ現在數ハ一萬五千九百有餘ナリト虽モ我海軍擴張完成ニ合計約三萬ノ小銃ヲ要スルカ故ニ唯現在モリヲ改良スルニテハ所要ヲ滿タス能ハス新ニ一萬四千

(二)

有餘ヲ製造スルカ又ハ陸軍ヨリ古銃ヲ買受ケテ之ヲ改
造セサルハカラス此故ニ設ケテ充分改良シ得ル見込アリト
スルモ唯改良ニ要スル費用ノミヲ支出スルハ足リシ認見
ヲ爲スヘカラス新ニ一萬四千有餘ヲ製造シ又ハ購買
改良スルノ費用ハ事ヲモテサヘサルハカラス

目下改良機二種アリ（秋原及本岡機）然レトモ本岡案ハ免
モ角若シ秋原式ヲ採用セトセバ彈藥色ヲ改造セザハ
之ニ適合セズ而シテ彈藥色ヲ改造セトセバ其ノ藥ヲ
抜きテ藥色ノ底部ヲ改造セサルハカラス其ノ手數困難
ナルコト言ハスレテ甚ク明カナルモノナラズ斯クシテ改造セバ
モノハ其ノ底部ヲ清淨ニシテ費用ニ適セサルノ結果ヲ生ス
ルモノナリ（カラス）且ツ七百萬餘費ノ彈藥決シテ少數ニ
ハアラスモ若シ村田銃ヲ豫備銃トシテ存シ置クコトハ
スレハ之ニ對スル彈藥トシテ保存シ置ク（中）が故ニ必スシモ
此七百餘萬費ハ無益ノモノトナルコトナラズ必ホ一全ク新銃
三

(三)

ヲ採用スルナリテモ實際之ヲ備付ル迄ハ村田銃ヲ充
 附シ置クヲ要シ又之ヲ射撃練習ヲ爲サシムルヲ要ス
 ガ故ニ新銃ヲ備付ル迄少クモ七百餘萬弗ノ約半方
 ハ費消シ尽スヘシ是ニ因テ之ヲ觀シハ村田銃彈藥七
 百餘萬弗ノ貯藏アルガ故ニ其小銃ヲ將來ニ引續キ
 用フルコトニ意々タルハ甚々謂シ無キ事ト言ハサルヲ得
 尤モ本國案トシハ彈藥改造ハ要セサルガ故ニ前段ノ
 如キ要ハ無キモ尙ホ後段ノ理由ニ至テハ異ナルコト無
 何物ヲ同ハス其考按ハ番上ノ説明書ノ上ニハ設金毫
 モ尙然スヘキモノナシト云モ之ヲ費用ニ供スル迄ハ其多
 ノ經費ト時日トヲ費シテ之ヲ費賁セル上ニ至セハ
 敢テ信ヲ置クヘカサルハ從來ノ経賁ニ依テ明ナリ下
 瀬火藥伊集院信友ノ今日ノ信用ヲ博セル迄ニ至ル
 賁ハ適例ナリ其他亦多ク費賁ノ結果考按ハ採用ニ至
 ラザリシモノ數ナラス而シテ費賁不充ナルヲ採用ノ

後期手ナラスレテ廢棄スルノ止ヲ得サルニ至ルノ例モ亦無
 キニアラス。聞クナラシ我陸軍三十年式銃モ今日ノモト
 ナル迄六分多ノ實験改良ヲ加ヘタルモノニシテ初メ工廠
 ニ於テ充分ノ實験ヲ爲シ更ニ大山學校及二箇聯隊
 於テ實験セシメ其間改良ニ改良ヲ加ヘテ舊案ノ大体ニ
 於テ未セルニアラス。其多ノ細ナル部方ノ強弱、厚薄、長
 短、形狀、取附場所等實験又實験漸ク其適宜ヲ
 發見セルニ至リト云フ。最早充分ナリト見込ヲ以テ
 七萬餘挺ヲ某々師團ニ交附セシム。此ノ如キ多量ノ兵
 ノ手ニ掛リテハ又意外ノ事アルヲ推見シテ更ニ改良ノ
 必要ヲ認めタルモノ歟ナリサリト云フ。是ニ因テ之ヲ親シ
 ハ秋、京義、ハ本國案ヲ土基トシテ現村田銃ヲ改造セシ
 トスルトキハ先ツ六分多ノ改造小銃ヲ以テ其多ノ經費ト時
 日トヲ費シテ之ヲ實験セサルハナラス、而シテ其充分信
 ヲ置クニ至ルニ至ル迄ハ其何ノ歲月ヲ要ス（キハ殆ト豫言）

(四)

スルヲ得サルナリ
 假リニ九種ノ年月ヲ要セスレテ其後驛ヲ完結シ好小銃
 ヲ得ルノ見込確立ストセシカニ一ニ按テ述ベタルが如ク購
 買スルハ現在ノモヲ改造スルニ新ニ工場ヲ設ケサルハ
 三サルノミナラス、所要敷ヲ充タスニ一萬四千有餘ハ全
 然新村田銃ヲ製造スルカ又古村田銃ヲ陸軍ニリ
 譲リ重々之ヲ改造セサル(ヤラス然ルニ單ニ小銃製造
 所ト謂ハハ一考甚ダ簡單ナルが如クナレトモ實際ハ九
 程簡單ナルモノニアラス陸軍ハ最早村田銃ヲ製造セサ
 ルが故ニ之ニ依頼スルヲ得サルナリ)目下我砲兵工廠ニ按
 小銃製作ノ手續ヲ簡シニ書ニ九百九十餘ノ作業
 法ニ依リテ修メテ之が完成シ出ルモノナリトモ亦以テ
 容易ニ其工場ヲ建設シ得ルモノニアラスレテ尚又無経
 験ナル人ノ手ニ委ス(カラサルモノナルヲ知ルニ足ラシ或ハ
 我々按ニ依リ外國ノ小銃製造會社ヲレテ之ヲ製

造せしメント言ハシカ別存最密ナル監督ヲ去ス能ハス
 シテ如何ナルモヲ(小銃ハ大銃及大砲彈丸等ヨリモ緻
 密ナル兵多ノ部方ヨリ成立ツカ故ニ綿密ナル検査監督
 ヲ要スヘシト認ム)供給セラルハ至ル中測ル(モウサル掛念
 アルイナラス經費ノ点ニ至テモ彼ハ新ニ製造器械ノ
 製作ヨリ着手スヘク且ツ工銀不廉ナルが故ニ決シテ
 経済的ニ之ヲ得ン下能ハサルヘシ何レニシテモ現在ノ一
 萬中百餘ノ小銃ニ急ムタルが如ク此ノ如キ筆ヲ執
 ルハ經濟上甚ク不得策ナリト謂フヲ得ヘシ
 委員ハ前記ノ如キ諸点ヲ考慮シ村田銃ヲ改良シテ之ヲ將來ノ
 海軍銃ト定ムル件ハ今日ノ諸情況上移メテ速カニ海軍ノ小
 銃ヲ一定スル必要アルトシ經濟上ノ得失トニ顧ミテ甚ク不得策ニ
 シ且ツ姑息策ナリト認メテ之ヲ否決スルニ至レリ

第三 陸軍三十軍式ヲ採用スヘシト決議セル理由

村田銃ハ唯リ現在在任ニテノミナラズ之ニ改良ヲ加ヘテ採用スルコトモ
 不得策ナリト決議セシ以上ハ新銃ヲ模造スルニキハ自然ノ結果
 ナリ而シテ後來委員ハ舊銃ハ倣リニ村田銃改良式ヲ用井
 居リテ(現委員ハ前記ノ理由ニ依リ此事實ハ言ヒ易クシテ實行シ
 難キミナラズ新銃ヲ備フル近ニ二重ノ経費ヲ要シ甚ク不得策
 ナリト認メテ否決セリ)將來ノ採用銃トシテハ自働銃ヲ模造ヘ
 シト決議セシガ現委員ハ此決議ニ同意ヲ表ス能ハス今先
 ツ其理由ヲ述ベシ自働銃ハ理想銃トシテハ敢テ不可ナレハ
 キモ今日委員等ノ所ニ依リハ該式ノ小銃ハ未ダ軍用ニ
 適スルモノ世ニ出ラズ隨テ各用未ダ之ヲ採用セルモノアリテ唯來國
 海軍省出版 Information Album ニ掲ハハ独國モウセル會
 社一、自働小銃ヲ製シ(此番業大體モ該書ニ在リ)之ニ依テ東京造
 兵廠ニ於テ模造セルモノアリト虽モ結果満足ナラズ(會社ハ伊國陸
 軍將校ヨリ、ゴーチ、考據ニ係ル所ノ自働銃ハ發明專賣特

詳し得たる下並ニ自働鏡ナルハ将来小鏡ト為ルヘシトモ意見
 若者ノリ記載セリ(得前ノ委員ハ蓋シ此意見ヲ善妙トシテ決
 決議ヲ為シタルニマスヤト思タス)然レトモモラセル會社ニ於テ
 未タ軍用ニ適スル自働鏡ヲ有セザルハ彼會社ヲ高田利金
 ニ送レル返書並ニ本委員長ハ去月該會社代理人ト面談セル
 ト中彼が言明セル所トニ依テ推察タルヲ得ヘク(将来ハ或ハ其様モ
 出来ルヤモ知ス)現在ハ其望無シト言ヘク)ゴリゴリ鏡ニ至リ
 テハ現物既ニ到着セルモ一見シテ其費用ニ適セザルハ委員等ノ等シ
 ク認メ所ナリ此ノ如キ次第ナルガ故ニ自働鏡ノ軍用ニ適スルヲ見
 ルニ至ルハ其果シテ何レノ時ナルヤ得テ知ルヘカラス然ルニモ拘ラズ其之ヲ
 見得ルニ至ルマデハ考案ニ善妙ヲ重ク調査ニ調査ヲ加フルコトニ努
 メ夫迄ハ採用新鏡ヲ決メセサルガ如キ躊躇ナク處置ハ(技術會
 議委員以外本職アルモノが此事ニ関シテ金力ヲ尽シテ調査ヲ為
 ス)餘格ナキ下ハ先ハ考案セサルヘカラス)其好ヲ目的トス(軍

備ノ主義ヨリシテ新シテ採ルベキ事即ニアラスト思召入見シ再議ノ
結果前委員ノ理想ハ敢テ否認セサルモ其決議ニ至ラハ之ヲ翻ス
ノ止ムヲ得サルニ至リシ所以ナリ既ニ前委員ノ為セル談談議ヲ否認セル上
ハ新銃ハ矢張連發銃ノ一種ナルベシト決セハ自然ノ結果ニシテ尙ホ違
ンテ其連發銃ハ最モ我陸軍ニ至リ可トスト決議セルハ尤ノ理
由ニ依レルモノナリ

(一)

如前ナル小銃ヲ採用スルトモ善ク之ヲ内國ニテ製造シ
得んナラハ外國ニ於テ製造セシムルヨリモ得策ナラトハ蓋
シ言フ候タサル(シ我陸軍ニ至リ可ト採用セル我砲兵工
廠ハ充方ニ其材料凡ノミナラス其経験アリテ容易ニ之
ヲ製作セルコトヲ得(シ)

(二)

我砲兵工廠ハ東洋度ニ大ナル事業ハ殆ト皆無トナル由
ニテ工廠維持ノ為ニ事業ヲ見出スニ苦ミ居ルガ故ニ
海軍ヨリ小銃ノ注文アラハ喜ンテ之ニ應ス(シト謂フ)

(三)

委員ハ從前砲兵會議ニ蒐集セル各國ノ連發小銃ヲ一覽シ其ニ一應他ノ材料ニ依リ各國小銃ノ事ヲ調査セルモノ銃金体ニ就テ見ルトキハ敢テ我ニ三十耳式ニ勝レリト認ム(キモノアルヲ見ス)

(四)

委員ハ三十耳式小銃ニ関シ砲兵工廠小銃製造所長陸軍砲兵中佐南部茂時ノ如ト二時同僚ニ涉ル所細ニ説明シ聞キシガ彼ハ甚モ腹藏ナク談銃ノ今日ノ状況ニ至ル迄實験セル諸種ノ缺點ト之ヲ改良スルガ如ニ苦心經營シテ發見セル方法ヲ説キ尙ホ進シテ目下各師團ニ交付シテ小銃トモモ未ダ完全ノモノト云フヲ獨々其改良法ノ略ヲ授ハレトモ(此等案ニ基キ製作セルモノ現ニ技術會議ニ在リ)之ヲ實行スルハ約百萬圓ヲ要スルガ故ニ採用セザルカ否ハ分明ナラズ若シ海軍ニ於テ陸軍式ヲ用井ニルハ此最近改良案ノ小銃(此等案ハ新ニ試験ヲ要スルガ如キモノニアラス)ヲ採用セザルハ

七

(五)

コトヲ勸告スト言ヘリ委員ハ右詳細ニ説明ト賣物ト
ヲ見テ大ニ満足セリ
但し三十年式小銃ノ口径六ミリ半ハ委員ハ唯何ト無ク過少
ナリトノ感覺見ハ起シタリ然レトモ陸軍當局者ノ得タル信
スヘキ實際(秘密ナリトモ)ニ依レハ別段憂フルニ足ラスト
言フ

(六)

三十年式ハ村田銃ノ物テノ缺点ヲ除キ且ツ其各部ハ何レノ
小銃ニモ流用シ得ルカ如クナリ居リ是軍用銃トシテ
甚タ利益アル所ト思タス

(七)

砲兵工廠ハ材料ハ既ニ貯藏アリ殊ニ銃床ノ如キモ充方乾
燥ヲ経タルモノ充方アリト言フ
而ホ多クノ日月ヲ費スナラハ或ハ各國私立會社ノ最新
式小銃ヲ取寄ルストヲ得テ且ツ其上ニ而ホ多クノ日月
ヲ費シテ更ニ無クハ是等ノ銃ニ就テ比較試驗ハシ
行フストヲ得テ或ハ其中ニ我三十年式ヨリ勝レルモノヲ發

(八)

見たりトモ有ルヤ測ル（カラエトモ）第一此方針ヲ執レハ
 何時調査完結スルヤ豫測スルヲ得ル第二經費ハ到
 底我三十軍式小銃ヲ備フルガ如キ小銃ヲ辨シ能ハサル
 ハ強ト言フ待テ第三陸軍ノ経験ニ依レハ實陸軍
 用ニ供スルハ一二挺ヲハ勿論百挺其処等ノ試験ヲ善良
 ナリト認ムルモハ未タ信用スルニ足ラヌ第四外國ニ注文シ
 ハ到底嚴密ニ監督検査ヲ為スヲ得ル第五設令
 若シ外國銃ノ中ニ多少我陸軍銃ニ勝ル所アリトスルモ
 元來小銃ハ海軍ニ於テ主要ノ武器ニアラズ然ルニ是レモ
 我海軍ニ於テハ我陸軍制式小銃ニハ信ヲ置カスレテ
 外國式ノモヲ仰カサル（カラエトモ）ガ如キハ我陸軍銃ノ
 信用ハ勿論延イテ國ノ体面モ損スルコトニシテ甚タ好マ
 シカラサル事ナリト謂ハサル（カラエトモ）
 外國銃及其彈藥ノ價格等ハ未タ調査セストモ尤
 ノ如キ我陸軍銃ノ價格ト同一若ク廉價ナルヘシトハ
 想像スル能ハス（モウセル銃一挺ヲ清國ニハ強ト百圓ニ

ヲ買入レタリト云フ但し信儀ハ明カナラズ
 三十年式小銃一挺ノ價(銀共)十五圓乃至十六圓
 彈藥一萬

取来三萬七毛

委員ハ右ノ如キ点ヨリ推シテ小銃其物ヨリ見ルモ經濟ノ点ヨリ論スルモ急
 速ニ我軍備ヲ完ツシ得ル点ヨリセツルモ(一月ニ五千挺ヲ製造シ
 得ルト云フ)國家ノ体面上ヨリ謂フモ將來ノ供給上ノ便ヨリ計ルモ我海
 軍ハ我陸軍三十年式(最近改良ヲ施シテ)小銃ヲ採用スルコト最
 モ相宜ヲ得タルモノナリト決議スルニ至リ

因ニ曰ク我陸軍ニ於テ小銃ヲ師團ニ交付スル迄ノ其検査ヲ為
 スノ手續ハ概畧九ノ如シ

砲兵工廠ニ一小部分毎ニ一々模範アリテ之ヲ通過セシムル
 ナラズ尙ホ模範ノ模範アリテ平生常ニ使用スル模範ノ誤差
 (使用ノ結果摩損等ニ由リ起ルモノ)ヲ正スニ供シ居リ而シテ
 此如クシテ工廠ニ於テ完全ナリト認めルモノヲ更ニ陸軍省ヨ
 リ斷ハス多數ノ検査員ヲ砲兵工廠ニ派遣シ工場一部

以上

ヲ占メテ極メテ綿密ナル検査ヲ行ハシメ之ニ合格セルモノヲ
 始メテ工廠ヨリ受領スルモノ、爲シ居レリ
 故ニ若シ愈我海軍ニ於テ陸軍式小銃ヲ採用スルハ全ク
 信用ヲ陸軍省ニ置キ陸軍師團ニ交附スルニ至ル迄ト同ノ
 検査ヲ爲ス下モ侃セテ依托スル最便宜ナリト思惟ス

陸軍三十年式歩兵銃

銃ノ長 ⁺ (剣ヲ除 ^レ)	^m 1,275
剣ノ長 ⁺ (鞘共)	^m 0,525
銃重量(剣ヲ除 ^レ)	^K 4,000
剣重量(鞘ヲ除 ^レ)	^K 0,375
口径	^m 0,006.5
膛綫ノ数	6,
施綫部ノ長	^m 0,7308
觀綫ノ長	^m 0,690
全備実包ノ長	^m 0,076
彈丸ノ全長	^m 0,0325
全備実包ノ重量	^K 0,022
装薬ノ重量	^K 0,0207

連率(銃口前二十五センチ)

678^m

弾丸径

8^m006,65

弾丸ノ重量

0^{kg}0105

1139

1138

第一部長

財政部長

内閣

軍務局

37
74
元

5000
3.3
15000
15
165,000.0
20000
3,300,000

20000
20A

400000A

33 12
4 = 8.25

改定機務

一 冊ノ二二

海軍採用式小銃ノ件ニ付報告

海軍採用式新式銃ヲ擇ムニハ容易ノ事ニアリ
 凡ソ以テ本國海軍技術ノ改造ニ依リ目下海
 軍ニ現存セシ材田銃ヲ改造シ一時採用ノ件
 呈シ枝會議案第一號ノ一六ヲ以テ報告致置
 候及今般更ニ同人ヨリ尚ホ多ク改良セシモノヲ提
 出及ニ付中人ノ説明及圖面実物等ニ就キ審議
 アリ又改造工費ハ前者ト異ナリトナキモ舊彈室
 及甲蓋ノ改造ニ依リ装填及取扱上ノ工合大ニ宜シ
 中ヲ得又聊カ重量モ減少シタルモノニシテ別ニ實地
 試験等ヲ為サシモ前者ニ優ルモノト付爾來一時

倣用トメ沙致造相成ルベキモノハ
造相成ル方可然儀ト史議致
面亦係此段更ニ報告仕候也

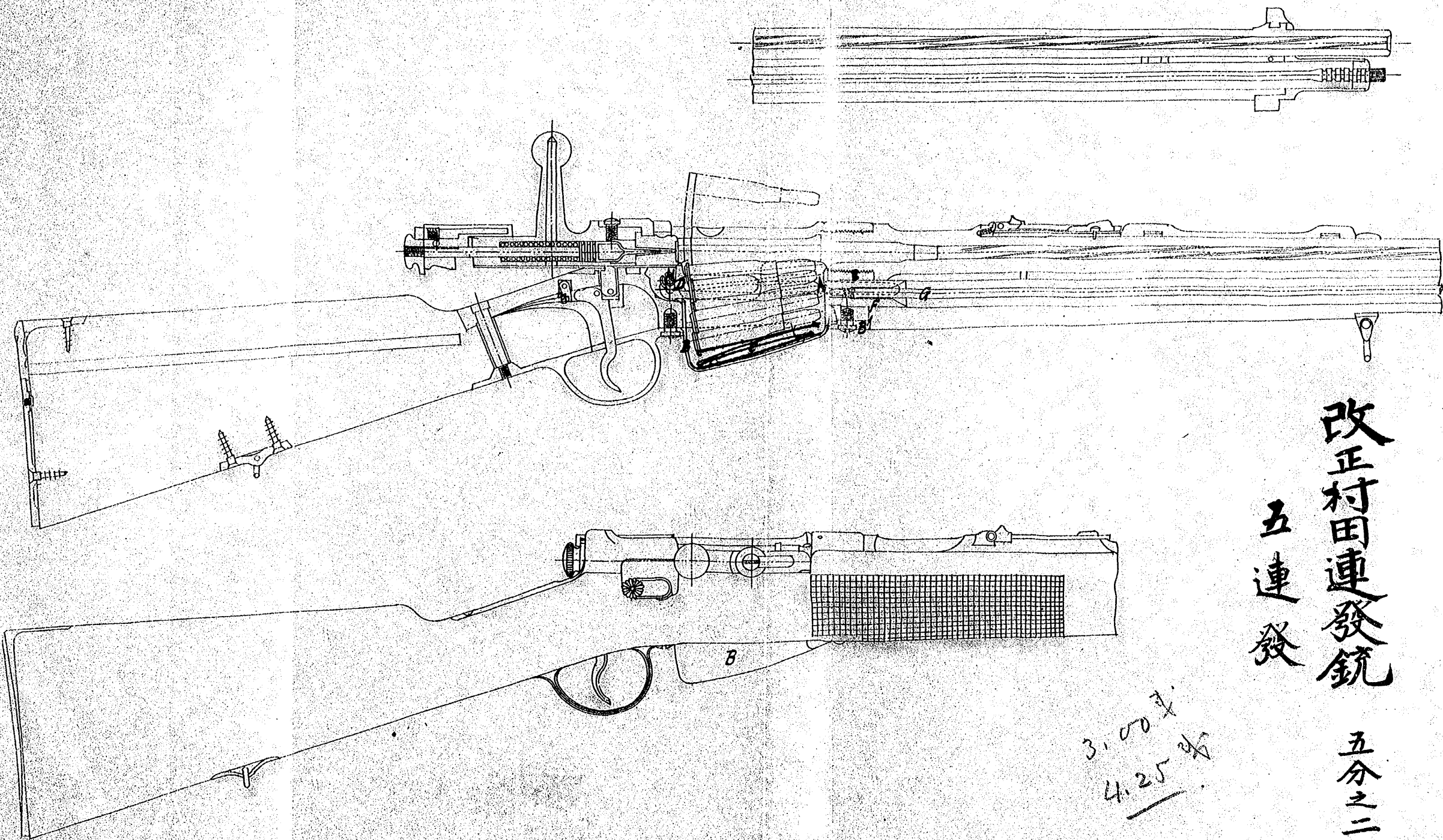
明治三十二年三月一日

海軍技術會議長角田秀松



海軍大臣山本權兵衛殿

1141



改正村田連發銃
五連發
五分之三

参考案ノ多ニ改修

3.00 4.25

軍令部長 

次長 

第二課長 

第一課長 

副官 

イノニ

副官 

参事官 

發付

月 日

三十三年九月七日起案

總政本部長 

副官 

大臣

總審長官 

第一部長 

部員 

經理局長 

第二課長 

軍務局長 

第二課長 

第一課長 

海軍採用式小銃、仰角

現用村田連發銃ハ發射、激動ニ係、破裂ヲ

海軍

起ニハ震シアリテ既ニ陸軍ヲ於テモ三十年式
 ヲ採用致スルヲ我海軍採用ノ式ニ關シテハ先
 キニ技術會議ニ於テ諮問相成ルヲ分別致シ
 如ク報告スル之完全ナル制式ヲ撰定シ之レシ
 製造スルニ於テ多クノ日子ヲ要スル儀ナリ本
 國鈺次郎ノ考案ヲ採用シ見用村田氏
 ヲ改造シ由全十人連發銃ヲ採用スル事ニ
 決定シ相成ルヲ仰テ裁可也

附記

本支那裁許兵船ニ由テ本海軍費五万五千八百
 十四年分經常費餘算内果遠兵船機費ヲ支弁可成又此
 之ノ外若シ同年分餘算不敷ニシテ場合ニ既定餘算内機
 費ヲ支弁ノ事多シ也

軍務局

供覧

第一部

艦政本部

海軍操典

第六

海軍操典 第六 小銃 年数表

官房第一七五三號訓令海軍操典(小銃)
 小銃 審議修補村田連發銃及村田連發
 銃ヲ改造シタル秋原銃ヲ海軍式小銃ト爲ス
 義ヲ否決シ更ニ新式銃ヲ採用スル必要
 アリト相議メタリ然レトモ完全ナル海軍操典
 式銃ヲ小銃ヲ採用スルハ容易ナキ事ニアル
 然レニ今茲ニ海軍技術中ニ大銃大砲ノ意
 匠ニ基キ村田銃ニ少ク改造ヲ施シ試験ヲ爲
 ス先ニ該銃ハ其成績良好ニシテ連發々射
 ニ適シ且ツ秋原式ニ比シ改造簡易ニシテ工

7.24

嘗て之を頼りしに、目下海軍に現存せん村田
 銃ヲ本國に依り改造、上完全ナリ新式銃ヲ
 撰定ス。此等銃ヲ採用せしむ可也。又、新式銃
 依テ、圖面及新銃力法等相、西口、後、勅告、佐、や

明治三十三年九月廿二日

海軍技術會議議長 角田 秀松

海軍大臣 山本 権兵衛 殿



本図式改造小銃試射方法

一 單發々射一彈藥倉裝填止 參拾発

二 連發々射 一方向 三面

三 銃ヲ前方斜リ高所ヲ地上ニ落シ直ニ發射ス

以上本図銃ニ就テ講究時向ヲ執リ反動

ノ如何ヲ見極メ故障等ニ注意ス

コト

以上ノ方法ニ拠リ本月八日東京造兵廠内ニ於テ試射施行

シタルニ成績良好ナリシ

(山口印行)

海 軍

村田彦寛院、本家持子考按通り
改定ニあり其種様様足儀う御集

但し一月約五万兩改定、又上

一全参万七千貳万四

様様三千六百元代價

別様細書之通り

一全五千五百八拾四

太運賃等係便料

但し様様束價ノ一割五分ニ示ん

一全四万九千七百八拾四

太仕關稅

但し様様束價ノ一割五分係便料

ヲ示し又其束ノ一割ニ示ん

一全三千六百四

太指分費

金汁金五万六千五百八十四

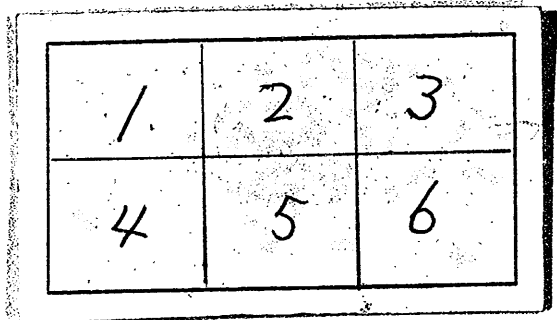
但し「ヤフケ」が并に取付け有り

村田正亮宛宛り迄に要する
材料明細表

名	種	数量	単價	代價
螺旋部迄材料	一	八〇〇	六〇〇〇	八〇〇
力形車鉋材料	三	九〇〇	二七〇〇	二七〇〇
車鉋材料	七	一、三五〇	九四、五〇	九四、五〇
堅厚鉋材料	一	一、二〇〇	四、八〇〇	四、八〇〇
作形材料	二	八〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇
堅削材料	一	一、二〇〇	一、二〇〇	一、二〇〇
力形鉋材料	一	六〇〇	六〇〇	六〇〇

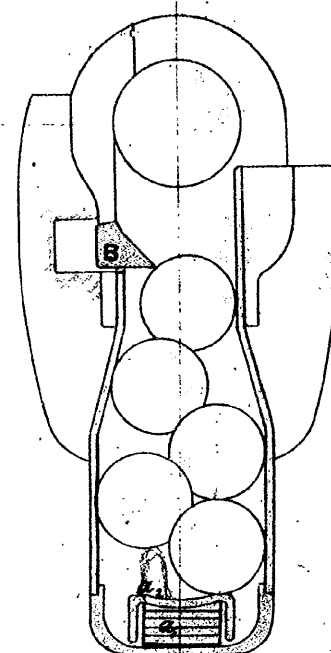
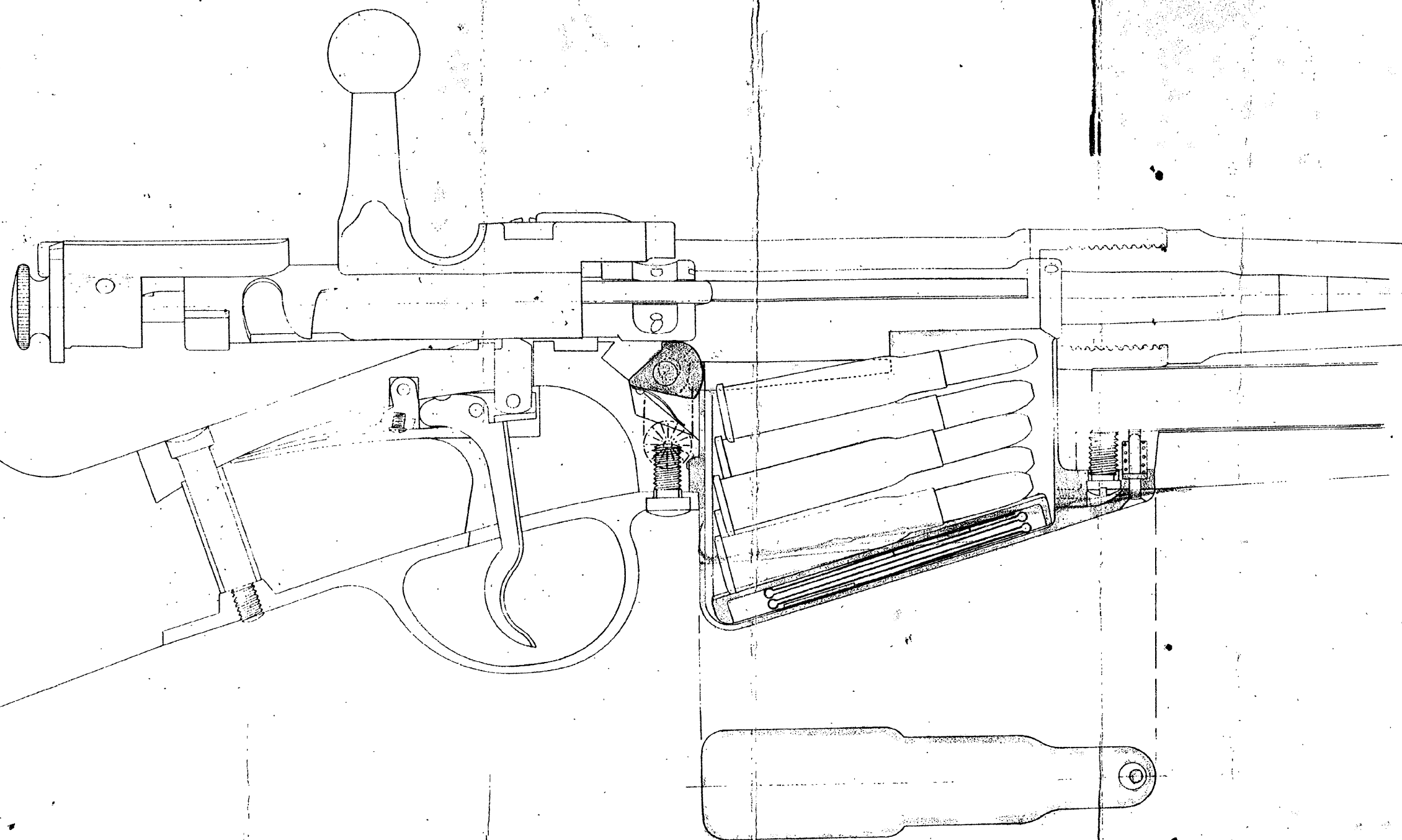
名	種	数量	単價	代價
鑽孔梯機		一	一〇〇〇	一〇〇〇
堅梯機		二	九〇〇	一八〇〇
落鐘籠		三	一二〇〇	三六〇〇
工物築造梯機		一	八〇〇	八〇〇
工物研磨梯機		一	一二五〇	一二五〇
研磨梯機		二	五〇〇	一〇〇〇
研磨梯機		一	六〇〇	六〇〇
計				
			六重六五	六重六五
			七千四百四	七千四百四

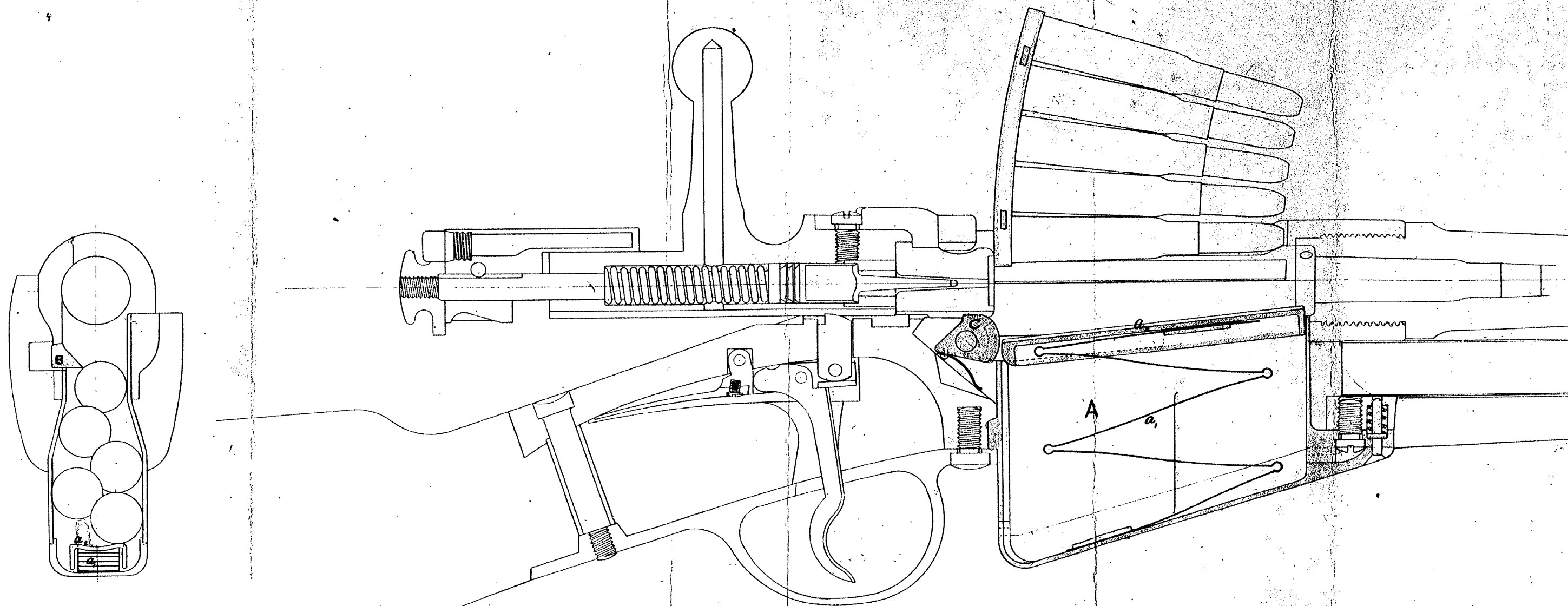
分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

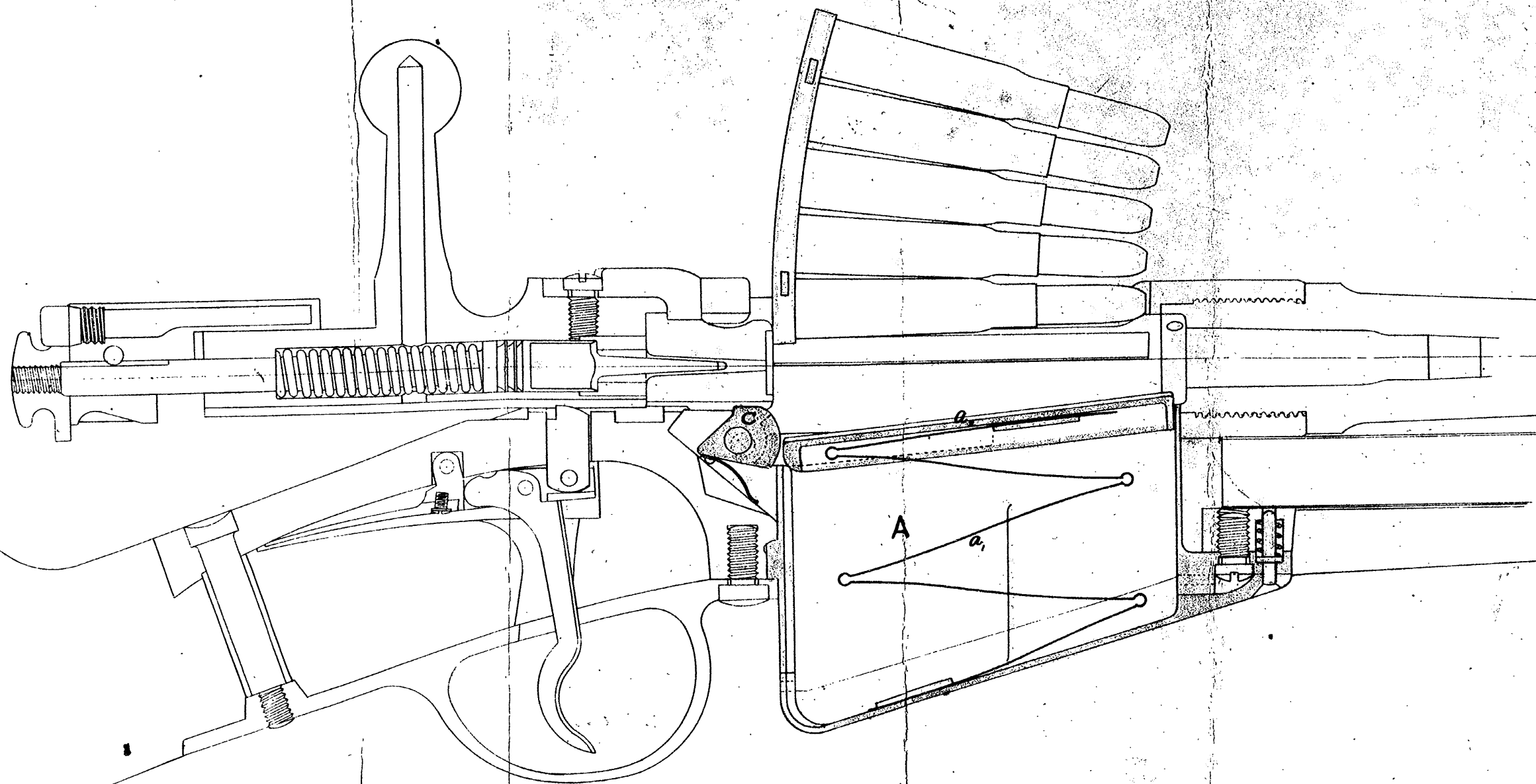
1151
1152
1153

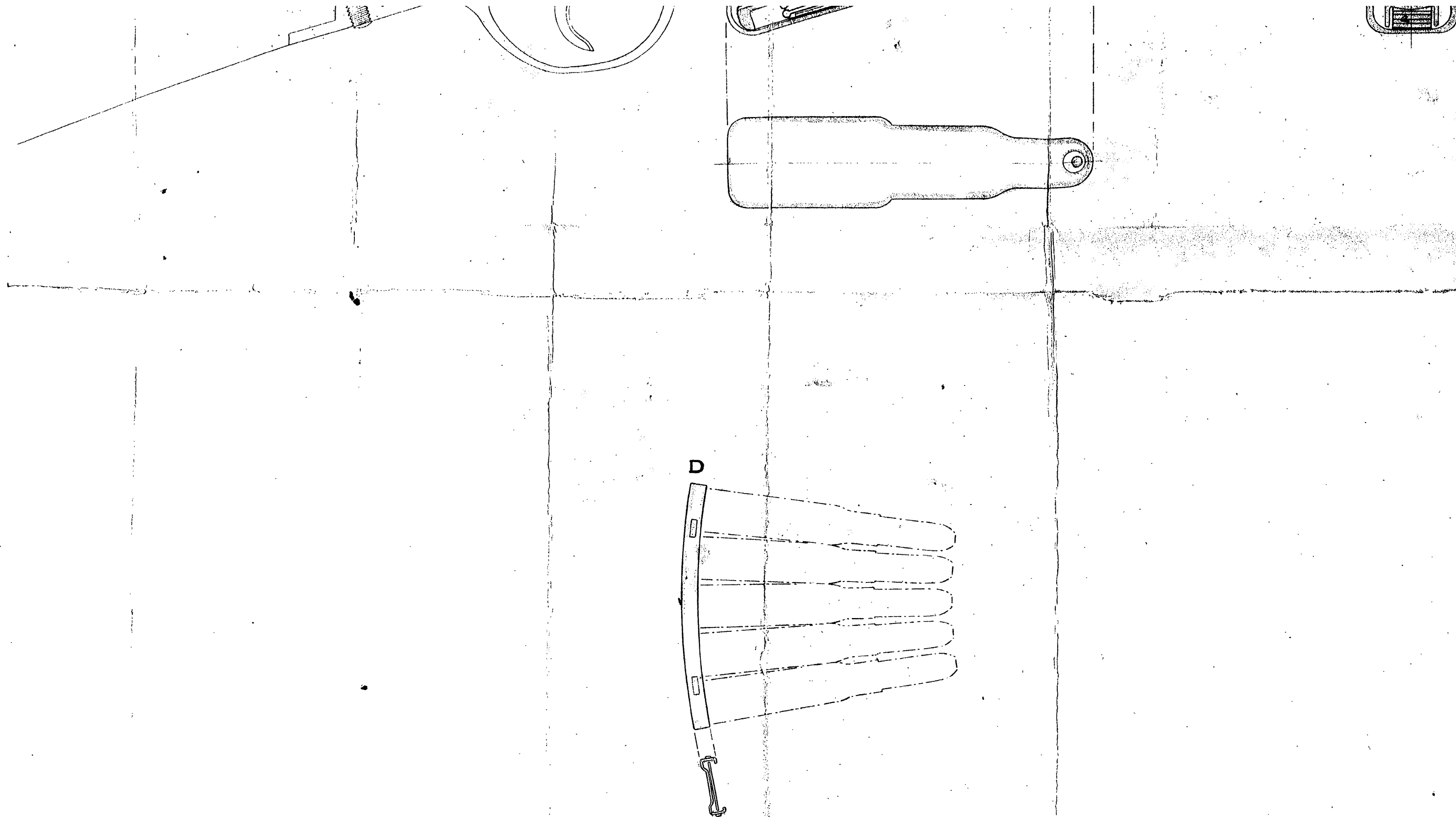
1154
1155
1156

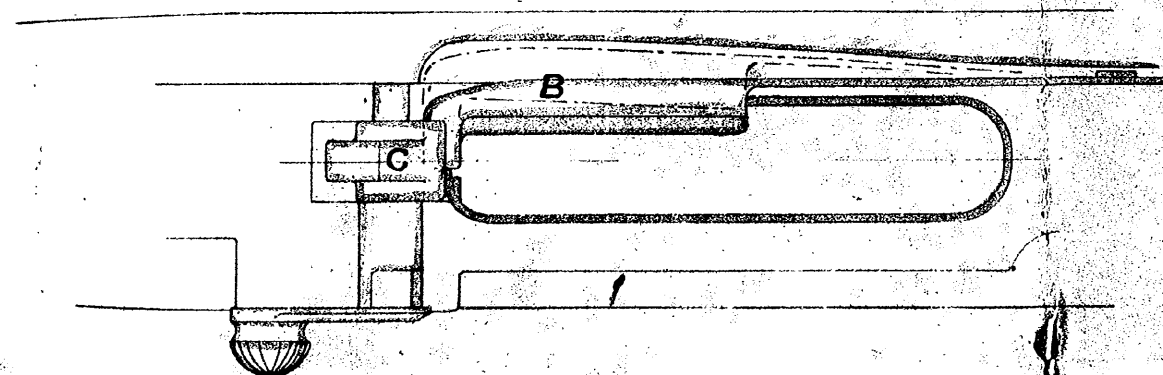
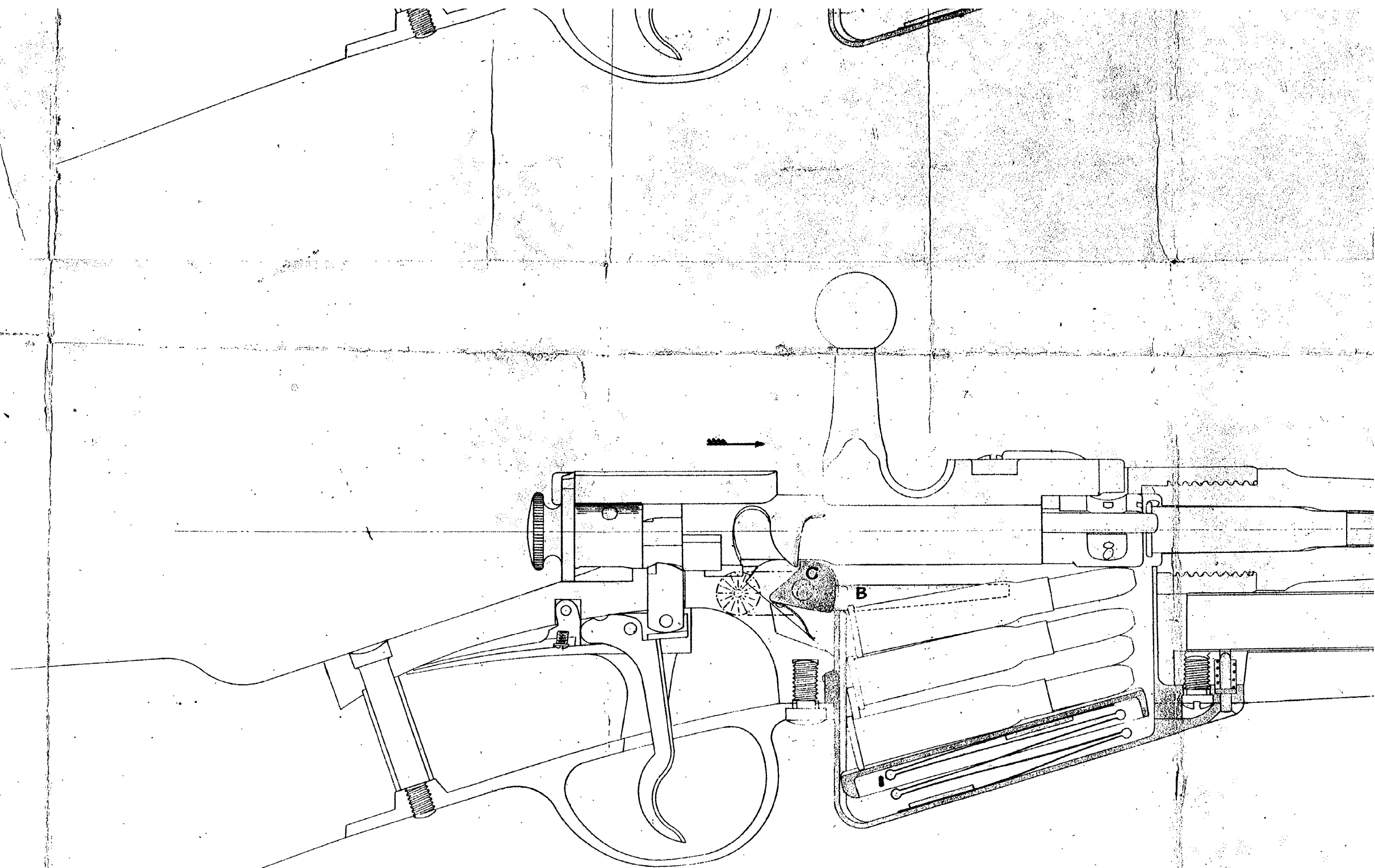




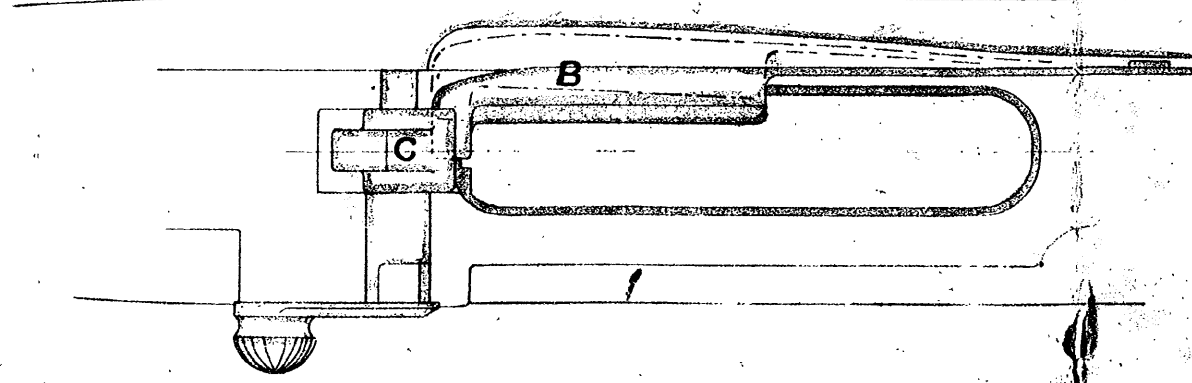
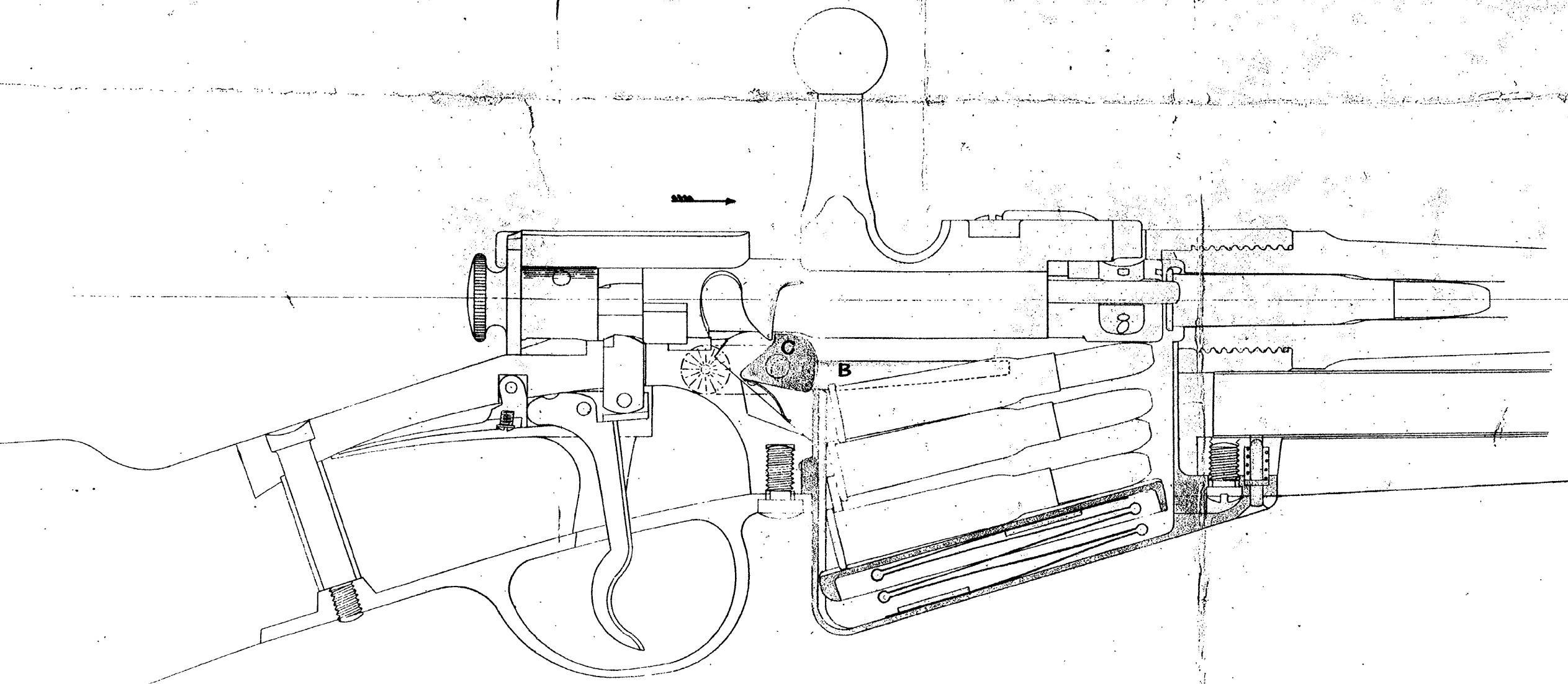
村田連發銃改正番







正
面



南

副官 



参事官

發付
七月九日

三十七年七月九日起案

大臣

次官



艦政部長

副官



第一部長



部員

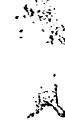


軍務司



第二課長







指し案

技芸課東第一号ハ海軍採用式小銃
試用也テ村田達受後列巻登下附ノ
件御詳ス

明治三十七年七月九日

海軍第四一〇號

現不変所方本初ヨリ海軍
軍務司

第一部

第四十

技會議案

一節八

海軍採用式小銃ニ関スル件ニ付上申

官房第一七五三號ヲ以テ審議ノ上報告スヘキ旨御訓
令相成候ニ付調査委員ヲ設テ調査審議セシ候
処一項及二項ハ否決シ三項ニ至テハ新式銃ヲ採用スル必
要アリト決議セシモ其銃ノ標準定ムル一朝一夕ニ之ガ完結ヲ
見ルヲ得サルハ必ス中熟議深查ヲ凝サレハカラス從テ長
時日ヲ要スル遺憾無キヲ保セサルガ故ニ新式銃ヲ標準ス
ルニ前ニ於テ本國海軍技手提出ノ改造意匠ハ大ニ見込
ニモテ先ツ之ニ基キ村田銃ヲ改造シテ依リニ採用ス
ルニ移度就テハ試シニ村田銃一挺ヲ改造シテ發射試
驗仕度候間左記ノ通り試験用トシテ所下附相成度

此殿上申仕候也

一本圖技手意匠ニ基キ改造シタル材田連彦鏡

一挺

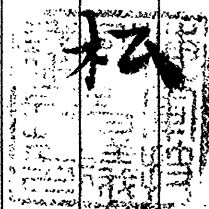
但此改造費金三円

一全用彈藥

五百發

明治三十三年七月十六日

海軍技術會議長角田秀松



海軍大臣山本權兵衛殿

進、又、海軍技術手意匠ニ倭主類一括、御用爲、
上匠、庄、在、候、也、如、